

1 学校運営の目標・方針

教育目標	<p>こころ豊かに たくましく生きる 自立した生徒の育成 ～互いに認め合い、磨き合い、支え合い、将来の夢につながる教育の創造～</p>
経営の基本	<p>(1)はじめに子ども(生徒)ありき 子どものために学校があり、子どものために教師があり、子どものために教育がある。 (2)建学の精神 自分をつくる ふる里をつくる 明日をつくる (3)「自分をつくる」5つの取組 心通う挨拶をする・集中して学習する・安全な生活を心がける・心をこめて掃除をする・未来に向かって目標を持つ</p>

2 本年度の重点目標

<p>(1)「生きる力」を育む教育の推進 「確かな学力」の育成 「豊かな心」の育成 「健やかな体」の育成 「キャリア教育」の推進 特別支援教育の推進</p>
<p>(2)子どもたちの学びを支える環境の充実 教職員の資質・能力の向上 学校の組織力の強化 修学環境の整備・充実 家庭と地域による学校と連携した教育の推進</p>

3 学校自己評価結果 (A 優れている B 良い C おおむね良好 D 要改善)

分野	評価項目・取り組み内容	達成状況	学校の取り組み状況・改善の方策
学校運営	教育目標(重点努力目標)をもとに、生徒への指導・支援を行っている。	B	生徒93%が「自分をつくる」5つの取組を意識し学習や部活動に取り組むことができている。教育目標の教室掲示や生徒会役員の呼びかけ等で多くの生徒に浸透している。
	行事やPTA活動等を通して、保護者・地域と一緒によい学校づくりに取り組んでいる。	B	コロナ禍で中断したPTA活動や地域と連携した教育活動をどのように再開するか検討が必要である。
	校内生活や登下校指導を全職員で行い、生徒が互いに思いやり、安全で心安らく学校づくりに取り組んでいる。	A	生徒は時間やルールを守り落ち着いて学校生活を送っている。登下校時の交通ルールが徹底できていない場面(2列並進等)があり改善を要する。
	日頃から、生徒が安心して相談できる信頼関係や、相談体制がつけられている。	B	生徒3人に1人が「相談しにくい」とした昨年度より大きく改善した。理由としてSCやSSWの専門性を生かし生徒・保護者への個別対応を丁寧に継続していること等が考えられる。
	生徒一人一人の適性や興味関心等を理解した上で、卒業後のよりよい進路実現に向けた指導・支援を行っている。	B	昨年同様、保護者の6～7人に1人が進路指導に満足していないことは課題である。本校の指導方針を広く伝え実践し、保護者の信頼を得なければならない。
	教職員全体で、いざというとき迅速に子どもを守り安全確保ができる。	B	日常起こりえる危険の種類や対応について周知し、自らの命の安全と他者の身を守る判断力・行動力を育成する必要がある。
	紛失・誤廃棄・不正アクセス防止に努め、学校・生徒・家庭の個人情報管理を徹底している。	A	教職員は新PC導入によるネットワーク環境の変化に対応する必要がある。情報リテラシーを向上させあらゆる個人情報漏出がないよう管理を徹底する必要がある。
	心身の健康と安全に配慮し、生徒自らが成長とやりがいを感じる部活動を行っている。	B	部活動の地域移行について検討を重ね、子どもたちが「楽しさ」や「喜び」を感じ続ける持続可能な指導体制づくりが必要である。
	異校種や地域と連携しながら、義務教育9年間の学びの連続性を踏まえた、教育活動を進めている。	A	佐用町型連携教育が2年目を迎え異校種間の連携が深まりつつある。教職員の評価Cが目立つが、授業数の多さ等で連携教育にまで至っていないことが理由として考えられる。
日頃から、生徒が安全に使用できる学校施設・備品の管理を行っている。	B	全職員による定期的な点検の徹底と、必要な修繕は迅速に対応し安全を確保している。	
教育課程	学びの喜びを実感させ、生徒の意欲を高める授業を実施している。	B	生徒回答は昨年比9%改善。一方保護者5人に1人が厳しい評価をしている。学校は保護者が授業参観できる機会をつくり、本校の学習指導について理解を求めなければならない。
	指導と評価を一体化させ、すべての生徒が分かりやすい授業づくりを行っている。	B	「分からない」を生徒のせいとせず、「分かる」喜びを与える授業を創造するために、学習指導要領の指導の柱に準拠し、組織的な研修や実践に取り組む必要がある。
	同僚とともに教材分析や指導法を工夫し、主体的で対話的な、深い学びにつながる道徳の授業を展開している。	B	講師を招いた校内研修を年3回実施。よりよい指導に向け研究を推進することで、授業に活気が生まれ生徒の意欲も高まった。保護者や地域の方が参観できる機会も検討したい。
	生徒が自主的・積極的に活動し、心身の健全な育成につながるように、行事の精選と内容を工夫している。	A	生徒や保護者の多くが行事を楽しみにしている。今後生徒数が減少する中で、本校がどのように行事を運営していくかが課題である。
	生徒が日常的に学習や情報収集できるよう、パソコンやタブレットを用いて、学習活動の工夫と充実を図っている。	B	GIGAスクール構想が推進され、1人1台端末の活用が授業や家庭で定着した。教師は生徒の学びを深めるICT活用について一層の工夫が求められる。
課題教育	全領域において、生徒が自他の違いや多様性を認める人権感覚を高め、一人一人のよさや個性を伸ばす教育活動を進めている。	A	生徒97%は学校が自分の個性や考え方を大切にしていると回答。一方保護者の6～7人に1人はそう考えていない。生徒や家庭の声に根強く耳を傾け信頼されることが肝要である。
	生徒の達成感や自己有用感を高める体験活動(わくわくオーケストラ、トライやる、修学旅行、奉仕活動等)を推進している。	A	体験教育の価値は高い。今後も工夫改善を行いその充実を図っていく必要がある。
	災害特性を理解させ、自他の命を守るために、主体的に行動する生徒の育成を進めている。	A	学校での避難訓練や防災学習の経験を生かし、中学生が家庭や地域との橋渡し役となる意識づけが大切である。
	特別な支援や、個別の教育課題に対応した指導を継続し、すべての生徒が支え合い認め合える学校づくりを進めている。	A	昨年度は「当てはまらない」と考える保護者が25%いたが半減した。その理由として学校が個に応じた指導・支援に可能な限り取り組んでいる結果だと推測する。
	新型コロナウイルス感染症について正しく理解させ、感染予防と衛生環境づくりに取り組んでいる。	A	新型コロナウイルスの感染者数は減少しているが、今後生活様式が変化しても恒常的な感染防止策を行う必要がある。
	人やものへの感謝の心を育て、責任感を育む清掃活動を進めている。	A	生徒は高い意識で清掃活動に取り組んでいる。教職員はこの活動が発展するための指導や評価の要点を確認し継続的に指導する必要がある。
		A	

4 学校評価の実施方法についての学校関係者評価

- ・三者(生徒、保護者、教職員)にアンケートを実施し、様々な視点から学校評価を検討することは適切である。
- ・アンケート結果を数値化・グラフ化し評価するのは客観的でわかりやすく、前年からの変化も把握しやすい。
- ・評価方法がA・Bの達成率だけでなくC・Dを加味し算出することで、学校の改善点が明らかにされている。
- ・結果(数値)だけでは表れない三者(生徒、保護者、教職員)の実態を考察し、学校運営に反映させる必要がある。

5 総合的な学校関係者評価

- ・三者(学校、生徒、保護者)の意識の違いを分析し指導に生かしながら、地域・保護者と連携を一層深める必要がある。
- ・社会や家庭・生徒の多様性に根強く個々に対応し、家庭・地域から信頼される学校運営を行う必要がある。
- ・学習実態を把握し基礎基本を重視した授業づくりと、学力課題のある生徒への丁寧な指導を期待する。
- ・地域や異校種とつながる体験的な学びを重視し、佐用中ならではの教育活動がさらに推進することを期待する。

6 学校自己評価結果に対する学校関係者評価

学校自己評価の結果及び改善方策についての評価
この結果を生徒に周知し、生徒が目標に向かって意欲的に活動する学校運営を期待する。
教師の17%があまり当てはまらないと回答した理由を明らかにし、保護者・地域と連携した教育の推進を求める。
地域内における生徒の登下校は概ねルールを守っているが、今後さらに交通ルールを遵守し、事故防止に努める必要がある。
不登校生徒が気かりである。卒業後の進路を保障する個別の支援と、個人を支える集団(学級)づくりが求められる。
生徒アンケートの結果は昨年度より改善した。今後は進路実現にむけ保護者とのコミュニケーションを密にし、より相談しやすい関係づくりが大切である。
危機管理は生命を守る重要課題であり、家庭・地域へは危機管理(防犯)意識を高める講演会等で啓発し、三者が一体となり子どもを守る責任がある。
教職員の情報管理は今後も徹底することを求める。また生徒や保護者の情報リテラシーを育成し個人情報を守ることが大切である。
部活動の地域移行は、受け皿となる団体や場所の確保等の課題がある。今後学校と地域(関係団体)が連携し、何ができるのかを継続的に協議する必要がある。
異校種との連携強化に加え地域が学びの場となるよう、生徒の意見を取り入れながら教育活動を推進することが大切である。
1月の警報発令時の学校の対応は十分に安全確保できたか検証を求める。あらゆる場で生徒を危険から守るには、関係者が状況確認を直に行うことが不可欠である。
教科による生徒の学習意欲や学習状況の違いを把握し、個と集団に応じた指導の工夫が必要である。また達成率低位の生徒に対するきめ細かな支援を期待する。
基礎基本を重視した授業づくりと、生徒の一人一人のよさを伸ばせる授業を求める。
学びを深めるにはよりよい人間関係が基盤となる。学級(集団)づくりと学習指導を一体的捉え、道徳科を中心に活発な授業が行われることを期待する。
学級減による縦割り班活動の導入は、従来気づかなかった生徒の長所を引き出す絶好の機会である。生徒の意見を生かし新たな行事が展開されることを期待する。
PC活用は必須であるが、インターネットの有害性や長時間使用による健康被害等についても指導することが大切である。
本年度の個に応じた継続的な指導や支援が、生徒の回答結果に反映されたと推測する。保護者への理解が広がる取り組みを期待する。
校区内にある施設でのボランティアや、地域づくり協議会等との協働的な活動を導入することで、教育活動に新たな視点が生まれることを期待する。
教職員が定期的に心肺蘇生やAED実習等に取り組み、非常災害時対応について専門性を高める必要がある。
学校は多様なニーズに対応できるよう、役割を分担し一人一人を組織的にサポートする責務がある。
今後、学校等でのマスク着脱は本人の自由意志になるが、外さない生徒がいじめやからかいの対象にならない指導が必要である。
無言清掃を継続していることは素晴らしい。今後さらに清掃に熱心に取り組むことを期待している。